シルクブランド「松岡姫」の商品化とその流通

（株）伊と幸 代表取締役社長
伊 藤 公 一

はじめに

この度、私ども株式会社伊と幸は、松岡株式会社、丹後生糸株式会社、河芳織物有限会社の協力を得て、繭から生糸・白生地まで日本で初めての統一ブランドとして、「松岡姫」を販売する運びとなりました。

「松岡姫」は山形県出羽三山の霊峰月山の山麓に広がる、羽黒町松ヶ岡地区を中心とする限定地域から産出された繭を原料として使用しています。この地区は明治５年の開墾以来、１２０有余年の歴史を持ち、ここでできた原料繭から生まれる細繊度１３デニールの生糸を使って、弾力性のある、大変優れた光沢としなやかな手ざわりの織物を織りあげることができました。

昨今は輸入ものの生糸や白生地の流入によって、わが国のきもの産業の根幹となる部分がますます脅かされている時代ではあります。しかしながら、私どもは、日本の文化としてのきものは、あくまでも、日本の風土に育まれた糸を使って、日本人の繊細な感性で織り上げられたものが、本来一番ふさわしいとの考え方をもっております。

このため、私どもでは今まで外国産の白生地は一切扱っておりません。特に今後のきものを展望する時、価格に対抗できる唯一の条件は「品質」の優秀性だと考えています。「松岡姫」はこうした考え方をもとに企画された商品ですので、本物のきものを求める人々の、心の琴線の必ずや響いて頂けるものと強く確信するものです。

「松岡姫」ブランド誕生の背景

周知のように、明治初期から外貨獲得に大きく貢献してきた日本の生糸は、現在では、大半を輸入ものに占められる程になりました。特に、「一元化輸入制度」等の政策も実行されましたが、海外の安価な生糸との価格差が大きく広がるなかで、国内の養蚕農家から買い上げる繭価格は農家の手取り収入を増やすには至らず、養蚕農家の減少や製糸業者の衰退にまで波及し続けたために、それとは逆に外国産の白生地は大量に輸入され、海外白生地産地を潤す結果となりました。

「松岡姫」はこうした輸入ものの生糸や白生地との差別化を図りながら、ある意

味で衰退傾向にあるきもののマーケットの活性化を期待して、この度、「松岡姫」が誕生致しました。

昨今は、きものマーケットだけでなく、日本経済全般にわたって、価格破壊を始めとする輸入攻勢にあおられてはいるものの、その反面で、あらためて品質や価格を見直す傾向があることも事実です。つまり、「本当に良いもの」を求め、見極めていく審美眼がもう一度ひとつの流れを作り始めているといっても過言ではありません

「松岡姫」はこのような背景をふまえた、きもの市場における新しい方向性を示唆するものと自負致しております。確かに、外国産の生糸や白生地は容易に、低価格で、しかも、大量に入手できる時代ではありますが、きものは日本の文化です。とりわけ、繊細さを求められているきものを創り上げる日本人の私たちの感性で見ると、どの生糸でも常に同じものができるわけではありません。やはり、日本の風土に育まれた原料でなければ、本当に良いものはできないといってもよいでしょう。

「松岡姫」は本来のきものに必要な条件を満たす事によって、きもの愛好者を心から満足させられるすばらしい価値を持っています。

なお、この「松岡姫」は、明治以来、繭の産地として優れいる山形県が農林水産省の繭ブランド産地育成事業の一貫としてスタートした新しい事業企画のひとつでもあります。

「松岡姫」の特徴

「松岡姫」は山形県出羽三山の霊峰、月山の山麓に広がる羽黒町松ヶ岡地区を中心とする地域から産出される繭から生まれました。この「松岡姫」は最高質の細繊度である１３デニール（長さ約９キロメートルの糸の重さが１３グラム）の生糸であると同時に、その生糸で織り上げた白生地までの統一ブランドです。

その特徴は

○細繊度独特の、繊細さしなやかさ

○細繊度特有の、嫋やかさ軽さ

○細繊度であるがゆえの、染めやすさ

○色斑の少ない、均一な染め上がり

○きめ細かな、色映えのする染め上がり

この最高の生糸の誕生によって、いまだかってない、美しい色と艶のきものを

織り上げることを可能にしました。

これまでの絹織物の生糸は、２１デニール以上がほとんどあり、１４デニール以下の糸を商品化することは、ひとつの限界でもありましたが、今回、私どものプロジェクトは、このテーマについて造形の深いスタッフの力で、これまで長い間培ってきた伝統ある技術と藝（わざ）を駆逐して、ついに、その実現を可能にすることができました。

「松岡姫」ブランドコンセプト

「きもの」は日本の豊かな自然と伝統、そして、繊細な匠の技の融合した文化です。「松岡姫」はその日本独特の、土と、水と、光と、風に、育まれた最高の生糸と、その生糸から織り上げられた白生地までの、生粋の、日本産ブランドです。日本人の感性でこそ、本物のきものの良さを初めて、見極めることができます。

「松岡姫」のブランド名は、かって庄内藩の第１７代藩主、源忠明氏により、羽黒町の松ヶ岡地区を開墾し、養蚕と製糸事業を開始した当時の品種名から名づけました。

「松岡姫」のふるさととも言うべき山形県羽黒町「松ヶ岡」は、明治維新の廃藩置県の折り、庄内藩士３千余名によって３００ヘクタール余の原野を開墾された土地です。

明治５年、この土地に彼らは桑苗を植え付けし、蚕種の製造販売を開始しました。以来、今日まで１２０有余年に至っております。

養蚕業に携わる農家が減少している今日において、この歴史ある肥沃な丘陵地に、祖先より受け継がれた開拓精神と近代的な養蚕技術によって支えられた、均一な優良繭が生産されている事実は大変高く評価されています。

その理由と考えられるのは

気候風土

蚕に適した風土、つまり、土質、水質に優れた肥沃な土地

しかも、適度に風通しの良い地形が自然条件として優れている。

繭　質

汚れや不良繭が少なく、均一質性が大変高い
細繊度を高めれば高めるほど、安定した品質が重要な条件になるため
「松岡姫」の場合、選繭を厳しくすると共に、
織物にとって、細繊度の糸であることが重視されます。

技　術

開墾事業の製糸部門であった企業や
絹織物の製造販売に、永年携わってきた企業で組織された
今回のプロジェクトメンバーの蓄積されたノウハウが
「松岡姫」を生み出しました。

「松岡姫」は、和の文化「きもの」を更に、至高の美しさに近づけました。

庄内地方で育まれた「松岡姫」は、最高質の生糸となり、日本が誇れる伝統の藝が加わることによって、優れた色と艶を保ちながら、美しい白生地に織り上げられます。やがて、それが和の美の結晶とも言える、あでやかなきものに姿を変えた時、人はその美しさに息をのまずにはいられないでしょう。こうして、生糸から白生地までの統一ブランド「松岡姫」は誕生しました。**きものの価値を真に見極められる人の「松岡姫」です。**

「松岡姫」は、一番最適な時期だけに限られた繭を使って、織り上げられる白生地です。手で育むように優しく、丹念に織られ、希少性とあいまって、その品質は人の心をとらえて離しません。

歴史をひもとけば、必ず登場する絹織物は、まさに「天の羽衣」のように軽やかな着心地の衣のイメージが強く印象づけられています。とすると、重さで量る従来の生糸の価値観は、「松岡姫」によって、きっと、見直さざるを得なくなるでしょう。１３デニール生糸を使った白生地の商品化は、本来のきものの道に戻る、いわば、「羽衣」の伝説の復活に思いが走ります。

白生地「松岡姫」の特長

○美しい色と艶の光沢感
○手ざわのりソフトさとやさしさ
○着心地の軽やかさ

○着姿のラインの映えるしなやかさ
○着くずれの少ないやわらかさ
○絹鳴りのする白生地

やはり染め付きがいいということ、それから、一般には糸の節が割とある生地が多いので、節はない方がいい。

我々の京友禅というのは、京都弁でいう「むっくり」、こくのある深みのある色に染まっていくということがやっぱり一番なこと。

我々の仕事というのは染めです。染めというのは、生地に乗せるんじゃなしに、生地の中まで浸透していくということですから、その受け皿である生地が我々の意図とする色をうまく出していく。非常に大切なことは素材ですねえ。

（田端喜八氏 染色工芸家 談）

きものはね、着心地の良さが大事なのです。何枚か着比べて見るとわかるんです。昔の糸は割合に細かったのに、段々と太い糸を使う傾向になりました。ただ重いだけでは困るのです。目方の重いものを襟元で重ねて仕立てられますと、もたもたしますの。やはり生地がすっきりしていること。何といいましても、素材となる白生地が大事でございます。その白生地のためには、糸質も上質の糸が使ってないときれいに織りあがりませんね。

今度は１３デニールという細い糸を使ったきものができるのは楽しみです。ちょっと染め上がりを拝見しましたけど、光沢が違います。それから、糸質ですね。しわにもなりません。着た時に女らしいトロっとした味わいがありますね。

（服飾研究家 木村　孝 氏　談）

松岡姫」販売概要

ターゲット

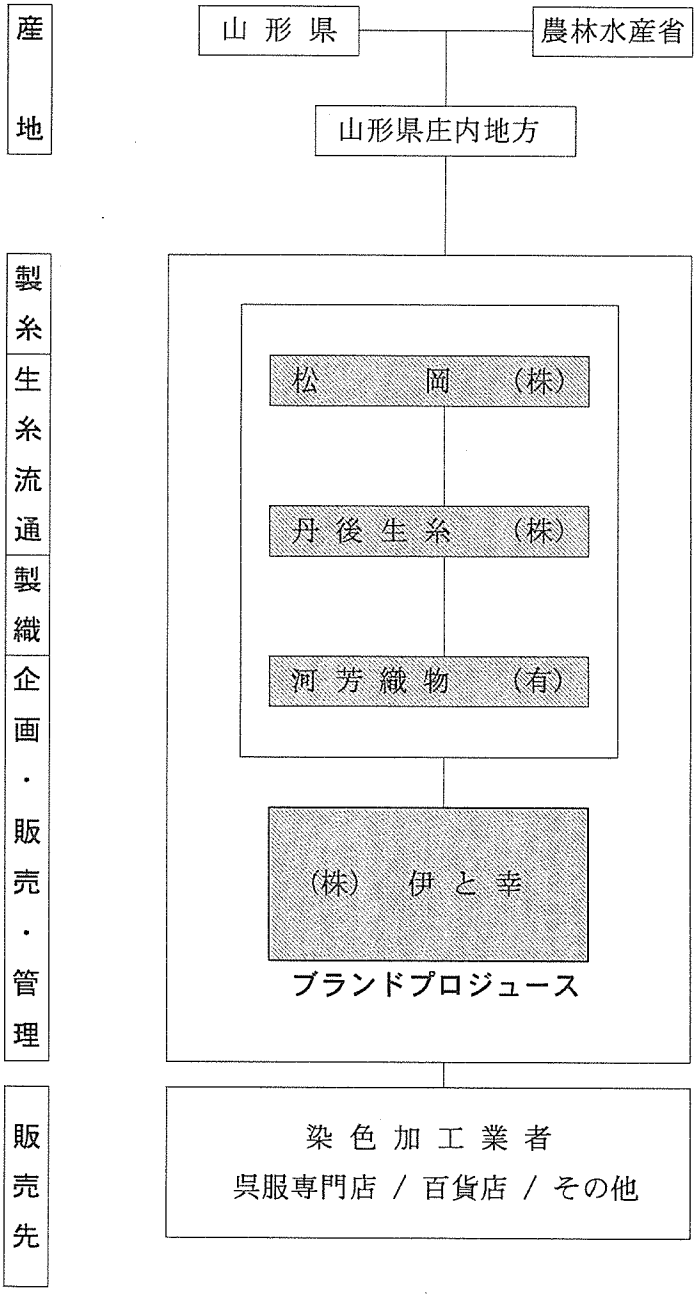
日本の文化である、本物のきものを求める人

日本人本来の繊細な感性を大切にする人

価格ゾーン

超高品質・高級ゾーン

販売方法

年間を通して一番いい時期の繭を限定使用し、しかも年間生産量を限定すると共に、販売量を限定する方法で販売します。

「松岡姫」プロジェクト体制